ながえの里だより

医療法人ながえ会　広報誌（第39号）

発行日　令和4年10月7日
発行責任者　西村美智子

日本医療機能評価機構 認定病院
医療法人ながえ会
庄原同仁病院
庄原同仁病院介護医療院
〒727-0203 庄原市川北町890-1
Tel：0824-72-7300
Fax：0824-72-7333
e-mail：info@nagaekai.com
URL：https://nagaekai.com/

「　実りの秋　」　　撮影者　管理部　山野友和
祖父より受け継いだ稲作1年目、田植機の故障で歯抜けの稲、雑草、鹿・猪、いろいろ経験できた1年でした。

基本理念

わたくしたちは、すべての人に等しく
仁愛の精神をもって接し、
心の通う医療の実践に努めます。

基本方針

患者様の満足：常に患者様の立場に立って行動します。
職員の満足：働きやすく、やりがいのある職場づくりに努めます。
地域の満足：医療サービスを通じて地域の方々に喜ばれるよう努めます。

「食べるということ」

医療法人ながえ会　理事長　村尾文規

喰ろうて寝て　寝て喰ろうて　喰ろうて寝て

以前、小欄で食事の折に『いただきます、ごちそうさま』と言うべきだと書いた。古い慣わしを今更という意見もあろうが、再度、取り上げたのにはそれなりの理由がある。言い古された言葉が言霊を宿していて食の真髄に至るのではないか、そういうことを考えた、考えさせられたと言った方が正しい。鈴木宣弘東大教授によれば、新型コロナ感染症、異常気象、ロシアによるウクライナ侵攻、中国の爆買いなどによって食糧難が生じ、２０３５年までに、日本人は飢餓に陥ると警告している。大量生産大量消費の時代は、とっくに過ぎている。食糧難の時代がそこまで来ている。テレビで放映されている『大食いの番組あるいはグルメ番組』の多くは食を冒涜するものではないのか。大戦で食糧難を経験した人たちなら誰しも苦々しく思っているはずだ。このような世相に突き動かされて食べることの意義を問い直してみた。

食欲とは欲望である。欲望を満たすことで得られる快楽を介して人間相互の感情や思いを伝達する役割もある。それは精神生活にかかわるものであるから料理を作る人の心と食べる人の心を繋ぐことができればその実は確実に上がる。人の生き方が問われている。

冒頭の文章は蓮如聖人が一休禅師に宛てた手紙である。解説によれば、食べるということは働くためでも、生きるためでもない、人間に与えられた本性として食べているというのである。食べるということは、人間とはなにか、生きるとはなにかというような根源的なことを問うていることになる。人は空腹になればイライラする、おいしければ貪る、不味ければ愚痴を言うなど、人の心身を煩わせ悩ませることから、食べるとは人の生き方とも密接な関係がある。飽食の時代と言われているが、果たしてほんとにそうか、今、一日一食に切り詰めている母子家庭もあるという。大阪西成区の『にしなり子供食堂』（川辺康子代表）では,市営住宅の一室を解放して、無料で、食べ放題の食事を提供している。一人で、持ち出しで始めた食堂は、今や、親子、手伝う人たち約４０名の人が集まり、いろいろな人がいて、いろいろな生き方があることを知り、彼らにとってなくてはならない場所になっているという。報道によるとこの種の子ども食堂が、全国に６０１４か所もあるという。子供食堂に通える人はまだ幸せだ。正確で客観的な情報は、何処にいても収集できる。今が本当に、飽食暖衣の時なのか、決してそうではないことは歴然としている。食べることに謙虚でなければならない。

私たちは殺生をしながら生きている。生かされて生きているということは忘れてはならない。食べることによる心の豊かさや満足感は豪華な食事でなくても得られる。子ども食堂に通う子供たちは準備された食事に満足しているに違いない。

作る人の思いが大切なのである。思いのこもった食事は、子供たちの胃袋を満たすだけではなく子供たちの心まで温めているに違いない。

精進料理は、食材と向き合い、食材を余すところなく使い、惜しみなく手間をかける、そのことが食べる人の心を惹きつけるのであろう。リピーターが増えていると聞く。

岩木山の麓で「森のイスキア」という心と命を感じる施設を主宰した佐藤初女さんのおにぎりで自殺を思いとどまったというエピソードを聞いた。彼女は、米一粒、一粒を丁寧に扱う、米を驚かさないように水は少しずつ入れて洗う。

おにぎりの手水は１回だけで、あとは掌に塩をなじませ米粒が潰れないように力を加減して握るのだそうだ。食材にたいする思いやりは、人が他の生きものの命をいただいて生きているという生の根源を思い知らされるのである。

幸い、当院の栄養課のスタッフたちも食欲をなくした多くのご高齢の方々の食事作りに日夜、奮闘してくれている。わずか２５ｋｇの高齢の女性は、諸姉らの努力で入院から７か月で３３ｋｇまで回復し、現在、ほぼ標準体重を維持している。９６歳の女性のケースでは食欲は必ずしも改善していないが、入院時と打って変わって、表情が豊かになっている。最近、訪れたご家族の声掛けに『ありがとう、感謝　感謝』と、はっきりと応えられたと聞く。食べる人も作り手の心をしっかり捉えているのであろう。着実に実績を挙げている。

ちなみに、一休禅師の返事は、『ああしてこうして　こうしてああして　ああしてこうして』である、この返事の解説がなかった。私の解釈はこうである。一休禅師ほどの高僧だからこそ、ご自身を凡夫として書いているはずであるから、『こころの赴くままに、とりとめもなく、あれをしたり、これをしたりしていると』いうことか、それは表向きのことで、頭を空っぽにして、無心に目の前のことに取り組んでいる。自燈明という言葉から推察すると、ひたすら自分自身と向き合っていることを伝える手紙なのであろう。食べることも、また、自分と向き合うことである。『他の生きものの命をいただいて、生かされていることを』を思い起こす縁(よすが)として、『いただきます』『ごちそうさま』と言いたいものだ。

笑顔の食事　～人との関わりは学びの日々～

私たち栄養課は、食べるということを通じて、患者さまと関わらせていただいており、そこには、日々、新たな気づきや学びがあります。

先日、慢性閉塞性肺疾患で酸素をされている患者さまが、座って食事をすることで、呼吸への負担がかかるため、ベッドに横になったままで食事をされていました。あっさりした果物を小さく切って出したり、手に持って食べやすいむすびやジャムサンドを出したりするなど、試行錯誤しましたが、どれも患者さまには負担のかかることでした。ある時、思いついたのは、横になったままでも食べやすく、噛む時間が短くて済む、つまようじ形式のお食事でした。お部屋にお持ちするとすぐに、患者さまから手を出して、パクパクと食べられ、『おいしいよ～』と言われました。私たちと患者さまの嬉しい感動の瞬間でした。

また、ある終末期の患者さまの話ですが、だんだんと食欲がなくなり、何かよい方法はないかと考え、ご本人に、『何か食べたいものはないですか？』と尋ねました。患者さまは、『塩むすび』と言われ、今はミキサー食しか食べられるご状態ではないのに、塩むすび？という思いでしたが、病棟スタッフと検討して提供することにしました。患者さまは、ふたくち食べられると、笑顔で『美味しいよ～』と言われました。その笑顔を見て、塩むすびに、何か昔のことを思い出だされているように思えて、ほっこりとする温かな気持ちをもらいました。

その塩むすびで、思い出される出来事がもう一つあります。今年8月、当院でコロナウイルスのクラスターが発生し、病棟スタッフが食事をとる暇もなく、遅い時間まで懸命に業務に従事するなか、栄養課では毎日塩むすびを作って出しました。『おむすびありがとう、美味しいです』、温かい声が返ってきました。豪華な食材を使ったオシャレな食事でもなく、ごく普通の塩むすびでしたが、大変な時期に、私たち栄養課スタッフの気持ちと病棟スタッフを繋いでくれました。

私たち、栄養課の役割の原点はここにあるような気がしています。患者さまやご家族、職員とのつながりを栄養課全員で大切にし、『笑顔の食事』を今日も、心を込めて作ります。

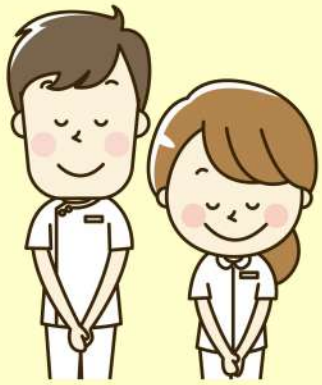
栄養課　主任　中原幸恵

写真上
「　つまようじ形式の食事　」
写真下
「　塩むすび　」

一つひとつに思いを込めて

調理員が中心となって、祝日や行事食の時、メッセージカードや箸入れなど、一つひとつ手作りで作っています。患者さまにとても好評で毎回楽しみにしてもらっています。

新入職員紹介



梶原　遥香【　栄養課　調理員　令和4年1月入職　】
「今年の1月に入職し、仕事にも慣れてきました。今後も、みんなと協力して頑張ります」

高田　妙子【　介護医療院　看護師　令和4年1月入職　】
「今年1月からお世話になっています。最初は戸惑ってばかりで、覚えることも大変でしたが、心優しい職員さんに恵まれ、助けていただいています。歳は取っていますが、気持ちは20歳代ですので、よろしくお願いします」

近藤　智枝【　医療病棟　看護師　令和4年4月入職　】
「日々精進！早くお役に立てるよう頑張ります」

山田　早織【　介護医療院　介護福祉士　令和4年4月入職　】
「今まで他の施設で働いてきましたが、病院で働くのは初めてで、慣れないことも多いですが、頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします」

玉川　京子【　医療病棟　介護職員　令和4年4月入職　】
「4月から医療病棟でお世話になっております。以前は、美容師の仕事をしておりました。ワーカーは初めての職種ですが、スタッフの皆さんや患者さんに優しく接していただき、日々勉強させてもらっています。少しでも早く戦力になれるよう精一杯努力してきますので、どうぞよろしくお願いいたします」

千田　希枝【　医療病棟　介護職員　令和4年5月入職　】
「介護の仕事は未経験ですが、少しでも早く戦力になり、患者さまが笑顔になっていただけるように頑張ります」

森原　弥央【　医事課　事務職員　令和4年9月入職　】
「人との出会いを大切に、丁寧で親切な対応を心がけて頑張りたいと思います」

松本　美由貴【　医療病棟　看護師　令和4年9月入職　】
「患者さまに寄り添った看護ができるよう頑張ります。よろしくお願いします」

新型コロナウイルス感染症のクラスター発生について

事務長　西村　美智子

8月に当院でコロナウイルスのクラスターが発生し、患者さま、ご家族には大変なご不安、ご心配をおかけいたしました。心よりお詫び申し上げます。このたびは、今まで経験したことのない非常事態で、庄原赤十字病院をはじめ、広島県看護協会、Peace Winds JAPAN（災害支援チーム）の方々から多くの支援をいただき、おかげさまで8月末に収束することができました。ご協力とご支援をいただいた皆さまには心より感謝申し上げます。今後も感染予防対策に注力し、患者さまやご家族に安心していただけるよう努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

編集後記

前号より約8か月ぶりのながえの里だよりの発刊となりました。今回初めて広報委員会に参加させていただき、院内の広報活動に携わらせていただきました。普段はあまり接することのない部署の方々と話し合いながら、どうすれば医療法人ながえ会のことをご家族や地域の方々により知っていただけるかを考える良い機会になりました。

今回、取り上げたテーマは「食べるということ」についてです。引き続きコロナ禍で制限の多い生活が続く中、「食事」というのは人間が健康的で文化的な生活を送る上で重要な活動の内の1つだと思います。当法人でも栄養課の職員の方々の尽力のおかげで、毎日の「食事」が患者さまの心身に良い影響を与えているようです。「食事」という活動にどのような意味を持たせているかは個々人によってさまざまでしょうが、「食事」という活動には食材や作り手へ感謝をするという意味が含まれているのではないかと改めて感じました。今後も院内の様子をながえの里だよりや法人のホームページ、Facebook等で発信していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

リハビリテーション科　作業療法士　西岡進吾